食品に関するリスクコミュニケーション（大阪）
- 日本における牛海綿状脳症(BSE)対策の検証に関する意見交換会の概要 -

1. 日 時：平成16年8月24日（火） 13:00～16:00

2. 場 所：オーバルホール（大阪市北区梅田3-4-5）

3. 主 催：内閣府食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省

4. 参加者：約260名

5. 議 事

(1) 開会挨拶

寺田 雅昭 食品安全委員会委員長

(2) 講演

「日本における牛海綿状脳症(BSE)対策について」

金子 清俊 食品安全委員会プリオン専門調査会座長代理
 （国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第七部長）

(3) 報告 「牛海綿状脳症(BSE)対策の現状について」

1) 牛のBSE予防対策

釘田 博文（農林水産省消費・安全局衛生管理課国際衛生対策室長）

2) 牛肉の安全対策

坂梨 栄二（厚生労働省医薬食品局食品安全部監視安全課乳肉安全係長）

- 休 憩 -

(4) パネルディスカッション

コーディネーター：中村 靖彦 食品安全委員会委員

パネリスト：金子 清俊 食品安全委員会プリオン専門調査会座長代理

海津 澄子 食品安全委員会企画専門調査会専門委員

（フードコーディネーター）

飯田 秀男 全大阪消費者団体連絡会事務局長

足立 梅則 兵庫丹但酪農農業協同組合副組合長

加藤 一隆 （社）日本フードサービス協会専務理事

アドバイザー：松本 義幸 厚生労働省大臣官房参事官

姫田 尚 農林水産省消費・安全局消費者情報官

(5) 会場参加者との意見交換

(6) 閉会挨拶

見上 彪 食品安全委員会委員

6. 主な議論

(1) パネルディスカッションの冒頭、コーディネーターより、

プリオン専門調査会の検証作業について、米国からの牛肉輸入再開と関係づけて捉えられている向きがあるが、この検討は3年前から実施されている国内対策の検証に限られており、輸入再開と直接関係のあるものではないこと、

食品安全委員会の検証作業がまとまっても、それで直ちに米国産牛肉の輸入の是非が決まるというものではなく、米国産牛肉輸入再開の可能性等については、更に種々の検討が必要であること

を説明、その後、パネリストから「たたき台」修正案について概要以下の意見が出された。

vCJDの発生リスクの試算について

- リスクの大小を定量的に把握するため現在の知見の範囲で試算することが必要。
- 未だデータが乏しいのでこのような試算は時期尚早。

検査の意義と限界について

- 現在の技術では検査で安全性を確保するのは難しいので検査はサーベイランスに限るべき。
- 全頭検査は、若齢感染牛を排除するなど消費者の安心と結びついているので見直すべきではない。
- 若齢感染牛に関しては、研究材料としては重要だが、異常プリオンの量的な観点から安全対策の対象とすべきではない。

特定部位(SRM)の除去について

- 今後SRMの範囲が拡大していく可能性があり、不安である。
- 現在の除去では不十分。
- 現在判明しているSRM部分を除去すればリスクは十分低減できていると考えるべき。

その他の管理措置(飼料規制、トレーサビリティ、と殺解体方法等)について

- 現場での実際の対応に懸念がある。
- 肉骨粉の使用禁止以降に誕生した牛に感染がみられたことから、飼料規制の実効性に懸念がある。
- 対応する生産者の事務的な負担が多いが必死に対応しているところを理解して欲しい。

取りまとめ案が難解なので、一般向けの解説資料が必要。

(2) その他、会場より、国内措置の検討に当たって、以下の意見があった。

食品安全委員会は、科学的知見よりも消費者の安心を勘案した評価をすべき。

科学者、専門家の考えていることが未だ消費者に安心感を与えていないので、十分なリスクコミュニケーションが必要。

(以上)